



果たし状

試し読み

置物の仇討ち

敵討ち 親と主では 雪と墨

は、と目覚めると知らない天井だった。長屋の雰囲気も何か違う。体が酷く気だるかった。

一太郎はそろそろと視線をあちこちに巡らせて見る。壁際に折りたたまれた万年床の上に寝ていた。目の前には諸肌脱ぎの男の背中。びっしりと汗をかいている。頭の上には壁一面を埋めるほどの大きさの百味筆筒^{ひやくみだんす}。反対側の上がり框には、ずらりと人が並んでいた。

ざわざわとした人々の声がする。目の前の男の背中に隠れて見えないが、しゅんしゅんと言う音がする。湯が沸く音だろうか。そして地の底で岩が回るようなごりごりと言う音もする。一瞬考えて、何かを磨り潰す音だと気づいた。その音が、一太郎の頭を掴んで振り回すようで、ぐらぐらとした。

一太郎は、散らかった記憶を何とか掻き集める。

——ああ、そうだった。

一太郎は永代橋の欄干に凭れ掛かって、ぼんやりしていた。ここから飛び込んでしまつたらどれだけ楽になるだろうか、そんなことを思っていたのだ。夕刻のことだ。足早に行きかう人々の気配を背中越しに感じていた。もう少ししたら、人通りが途切れる。そうしたらもう飛び込んでしまおう。全てを終らせるのだ。そう思いながら、空を真っ赤に染めて行く夕日を見るときもなしに眺めていた。

すると、「辰之進」と名乗る男に声を掛けられた。随分と調子の良い町人で、何のかんのと話し掛けられた。面倒なので、適当に相槌を打つ。飽きたら立ち去るだろうと思っていたのだ。だが、気がついたら何処とも知れない貧乏長屋に連れて来られていた。そこには、医者だと紹介された「勘造」と呼ばれたもじゃもじゃ髭の男と、「小梅婆さん」と紹介された老婆が居た。

「馴染みでネ」と紹介した辰之進を、「冗談じゃアねエ、手前エみたいな疫病神が馴染みなんぞ寒気がすらア！」と勘造が罵つたのが印象的だった。

そして、酒を勧められるままに呑んだ。酒の味を知らない訳ではないが、日雇いで日々を何とか凌ぐ貧乏暮らしの一太郎にとっては、一杯呑むのも二、三日絶食する覚悟で、ち

びりちびりとしみついたらしく呑むのが常だった。金を心配せずに呑む酒は、言い知れない後ろめたさも手伝って、殊更美味かった。

そして、そこからの記憶がはつきりしなかった。何だか、ゲラゲラ大笑いして、べそべそ泣いた覚えがある。

——情けない……!

一太郎はぼんやりと取り戻してきた記憶に恥ずかしくなった。彼は二十歳を越えた男で、しかも武士だ。それが人前で泣いたのだ。知りもしない人に、「助けてください」と泣きながら懇願した。言われた方も驚いたことだろう。一太郎は情けなさに、穴があったら入りたい位だった。

確かに、自分一人ではどうしたら良いか判らなかつた。思えば、これまで大事なことを自分で決めてきたことはなかつたのだ。昨日のことだつてそうだ。自分の意思とは関係なく、仇討ちをすることになってしまった。いくら人の決断に流されてきたと言つても、流石に仇討ちなどしたくない。だが、自分の時は押さえられている。逃げられやしなかつた。

勝手に仇討ちが決まつてから、ずっと悩んでいた。どうしたらいいか。どうすればいいか。しかし考えても良い案など浮かばなかつた。誰にも相談できなかつた。それが、酒を呑んだだけで、あっさり「仇討ちすることになったが、仇討ちなんぞしたくない。助けてくれ」と喋つてしまったのだ。しかも知り合いでも、武士でもない相手にだ。

「死にてエなら勝手にしろ！帰^けエンな！」

大きな怒鳴り声が一太郎の思考を破つた。目の前の背中の主が怒鳴つたものらしい。背中の向こうに誰か男が座つてゐるらしい。激しく怒鳴り合いが続く。大きな土間声が一太郎の頭を揺さぶる。

梅雨時の水はけの悪い貧乏長屋。そこへして大勢の人が集まり、火鉢にかんかんと火が熾つて、鉄瓶からは湯気が沸いている。薬草の独特な匂いと、湿つて饅えた匂いが混ざつて何とも形容し難い臭気がべつたりと纏わりつくようだ。なんだか水浸しの中をもがいて居るような気分だった。

気怠いまま長屋の物音や動きを見ていると、体が起きてきたのか酷い喉の渇きに頭痛と気持ち悪さが襲つてきた。とにかく水を飲みたかつた。

「アツツツツ……」

一太郎は、頭を抱えて億劫そうに体を起こした。

「ヤイ、酔いどれ、起きたか」

彼岸の橋番

絵師たちが聞いたこと。

鬼橋

備後国帝釈山の谷川に橋あり。石を以て切りたてたる長さ廿間、幅三間の反橋なり。これを鬼橋と号（なづ）く。土俗の説に、神代の昔帝釈天くんだり給ひ、数万の眷属の鬼来つて、一夜の中に全く成るといひ伝へたり、むかしこの橋をわたり得れば浄土に至り、渡り得ざるものは地獄に墮つといふ。今は渡る人なし。故に草木茂りて山とひとしきものなり。

〔諸国里人談 卷一〕

なにかの匂いが鼻先を過ぎたのか、わんと犬が吠える。暮れて六ツ半、蝸が甲高く鳴き、すれ違う人々の顔も見えにくいくらいには日も落ちていた。絵師の英順は桶を片手に草笛を鳴らし、小僧の風太とその仲良しの勝綱が草を斜めや縦に持ち替えながらふうふうと鳴らないそれを見合い、その後ろをててと尾に茶の斑がある白犬がついて歩いていた。

毎日、飽きもせず暑い日が続いている。今日も夕立がなかった、表通りの店は涼み台を出しているところもあつたが、川風も温いように感じ、誰しも仕事を終えて行く先は酒というよりも湯屋だった。とにかく汗を流したい、英順も長屋の井戸で水をかぶるしか出来なかつたが、やっと昼にひとつぶんの挿絵の仕事を終え、湯屋に来ることが出来た、暑さと仕事に疲れた身体は湯に浸かることでやっと癒える。

「あー。やつぱりダメだあ…」

「騙してるんでしよう、師匠」

「るせエ」子供騙してなんの得があるってんだあ。

ちえ、と小僧の声がしたが英順は機嫌が良い。

温くてもやはり風は気持ちが良い。どこへ行っても川にぶつかるこの界限は大雨の頃には増水量にぎよっとすることもあるが、この、暮れの風情が良い。春も夏も秋も冬もどれも同じようで違う色合いに空を染め、ぶらぶらと川沿を歩くのも目を楽しませる。居候は仕事が多くなると居着かなくなるし、今日はこのまま子供たちを店であり、家でもある『かつ』に連れて行けばあとは好きに飲める。仕事はまだあるが、酒は久しぶりだ。

「おう、かつ」ちょうどよかった。

橋の袂で一服していた棒手（振り）の男が声を掛ける。

「ハイ」



二

昼の晴れ間は夏が近いことを知らせたのか。しかし夕方からは一転、雲が増えて陽が落ちる頃には雨がしとしとと降り始めた。

ほとほとと大人しく腰高障子が叩かれ、ガタピシと建付けの悪い障子を開いて入って来たのは辰之進だ。

「居るかエ」

雨の鬱陶しを忘れそうなほど、軽い調子だ。

「見りゃア判るだろうが」

その軽い調子に更に機嫌を悪くした勘造は、仏頂面で吐き捨てる。

今日も今日とて勘造は、万年床の上に寝転がり茶碗酒を呷っていた。と言っても普通の酒は昨日で切れた。新しく買うほどの金はなく、仕方なく今日は買ってきたばかりのランビキだ。

小梅婆さんもランビキを相伴中らしい。一太郎は、昼間勘造たちにこき使われたからか、初めて会った時よりも疲れたような顔をして俯いて座っていた。

「ヲヤ、機嫌が悪そうなの」

辰之進は蓑笠を戸口で脱いで、外へ向けて蓑をばっさばっさ、と大きく振って水気を切る。外は雨模様ですっかり暗くなっていた。

「おまはんのお陰サマで」

「こりゃア、ヘソイ曲げたかエ？」

壁に笠と蓑をかけてしまうと、板間の上がって勘造の向かいに腰を下ろす。辰之進の左に小梅婆さん、右隣に一太郎が座っていた。四人の真ん中には茶碗とランビキが入っていると思しき鉄瓶、膳には肴代わりの葉唐辛子を盛った小皿に箸が散らばっている。

百味筆筒を背にした勘造の後ろには有明行灯が灯されていた。反対側には百味筆筒に寄せるように片付けられた長火鉢があった。どうやらもう炭を埋めたようだ。火鉢の端に鉄瓶が避けられていた。小梅婆さんの後ろにある障子の外は、まだぼうと蒼くほの明るかった。雨模様でありながら、陽が暮れる最後の明るさだ。

「ヲイ、曲げたはおイラが勝手サ。モウ、店仕舞いだヨ。コイツ連れて帰エリナ」

勘造は取り付くしまもないが、辰之進はまるで気にしていない。

「ちったア役に立つたろ？」

「役に立つたアいめいめしィ。用事を言い付けようが何しようがぼうつとしゃアがって、

ただの大きな置物だぜイ。ちつとどころかこれっぽっちも役に立ちアしねえわ」

文句を言われた一太郎は、畳に目をやったままだ。

「ナニ、手前エも澄まして言いやアがって、笑わせらアナ。ものの役にも立ちアしねえナ手前エと一緒にゃねエか。チロリに置物が二つも並んで尚いけねエヤ」

へへん、と茶碗酒を呷りながら小梅婆さんが鼻で笑う。

「オキヤガレ」

「まアまア、良い物をやるうから、機嫌を直しナ」

辰之進が苦笑いしながら、徳利を差し出す。酒と見て喜ぶ小梅婆さんを制して勘造がはっしと徳利を奪うと

「その手は桑名（食わな）の焼きハマグリだ、このヤロウ」

しつかり抱え込んで、辰之進を追い払うようにしつと手を振る。

「食ってるじゃアねエか」

辰之進が苦笑しながら擲う。

「で、この兄（あに）イはナニがどうだつて？」

ふと、話を変えるように辰之進が聞く。

「呆れた。それを解いて来たンじゃアねエのかエ？」

小梅婆さんは、勘造と徳利の奪い合いを展開しながら、呆れたように言う。

「ナニ、たまには真面目に商売しねエとサ。お得意様にも忘れられつちまわア。それに、どうも御用聞き風情の出番じゃアなかうと思つてサ」

辰之進はしれつと嘯く。

「勝手な診立てしやがらア」

勘造は辰之進を睨みつける。

「で？」

「知るかヨ。手前エで勝手に解きゃア良いじゃアねエか」

徳利に手を伸ばそうとする小梅婆さんの手をピシヤリと叩いておいて、勘造は行儀悪く栓を口で抜いて茶碗に注ぐ。

「ヲイ、チロリ、ちつと」小梅婆さんも茶碗を差し出す。

「あ？ちつと何だ」

「やらかしねエ」

「言われねエでもやらかさわナ」勘造は茶碗酒を呷り、美味そうに一息吐いた。小梅婆さんの喉が鳴る。

辰釜

親分が旦那から聞いてきた。

地獄の釜もかくやと思われるほどの熱気で江戸が覆われている。と、界隈の手習い塾の若師匠、園部隆一郎は舌を出した。犬のようだ、その隣でからから笑うのがその友の道場の師匠、宗平である。

「それでも両国には行かねえって言いやがるんですぜ」冷えるものを。

江戸随一の賑わいを誇る両国の広小路の夏は、夜は大川の花火、昼はあちこちの見世物小屋できゅつと身体が冷えるような仕掛けなどをして評判を呼んでいる。さんざんからくりやらで怖がらせておいて最後に冷や水をぶちまけてくれるというものもあると言いつ、三十二文も高くないとすら言われていた。

「せやから、それは、こないだ本を買ったからで…」

「銭がねえと言う」そういうことにしてやらア。

顎を撫でながらニヤニヤと笑う。

「……」

不貞腐れた顔で隆一郎は麦湯を飲む。表の戸を開け、腰高（障子）も取っ払い、通りからしか風は入らず、それでもないよりましで、自身番の暑苦しい座敷に二人はくつつくようにして上がり込んでいた。

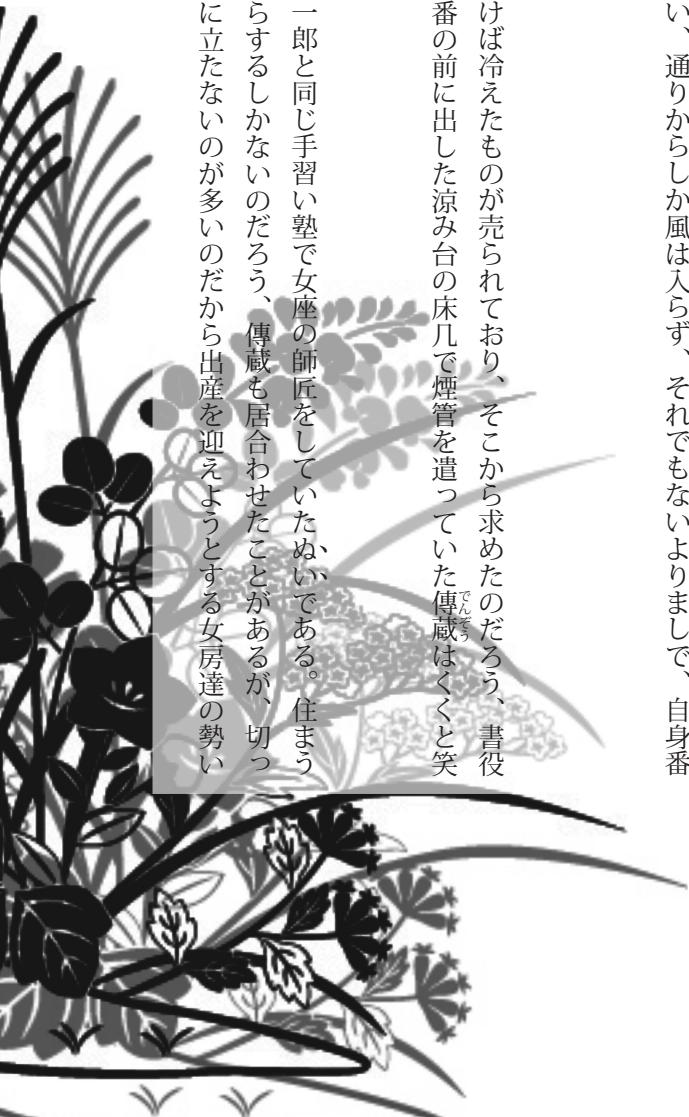
「手前、からかうだけだったら帰れよ」

「言うねえ」

両袖をたくし上げ、団扇を手に手土産の瓜をふらふらさせている。通りを歩けば冷えたものが売られており、そこから求めたのだろう、書役が笑いながらそれを受け取っていた。二人のそんなやりとりを聞きながら自身番の前に出した涼み台の床几で煙管を遣っていた傳蔵はくくと笑う。

「かみさんに追い出されたんだろ、まあよく来なすった」

途端にう、と潰れたような声があった。宗平はこの春、所帯をもった。妻は隆一郎と同じ手習い塾で女座の師匠をしていたぬいである。住まう長屋ではいまお産の真つ最中で、男は旦那ですら居場所がないのだからふらふらするしかないのだろう、傳蔵も居合わせたことがあるが、切った張つたの修羅場よりも度肝を抜かされた。いざ現場に居ても男は泡食って役に立たないのだから出産を迎えようとする女房達の勢いに気圧されて先に追い出される方が後で逃げ出すよりもきつと賢明だ。



* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)